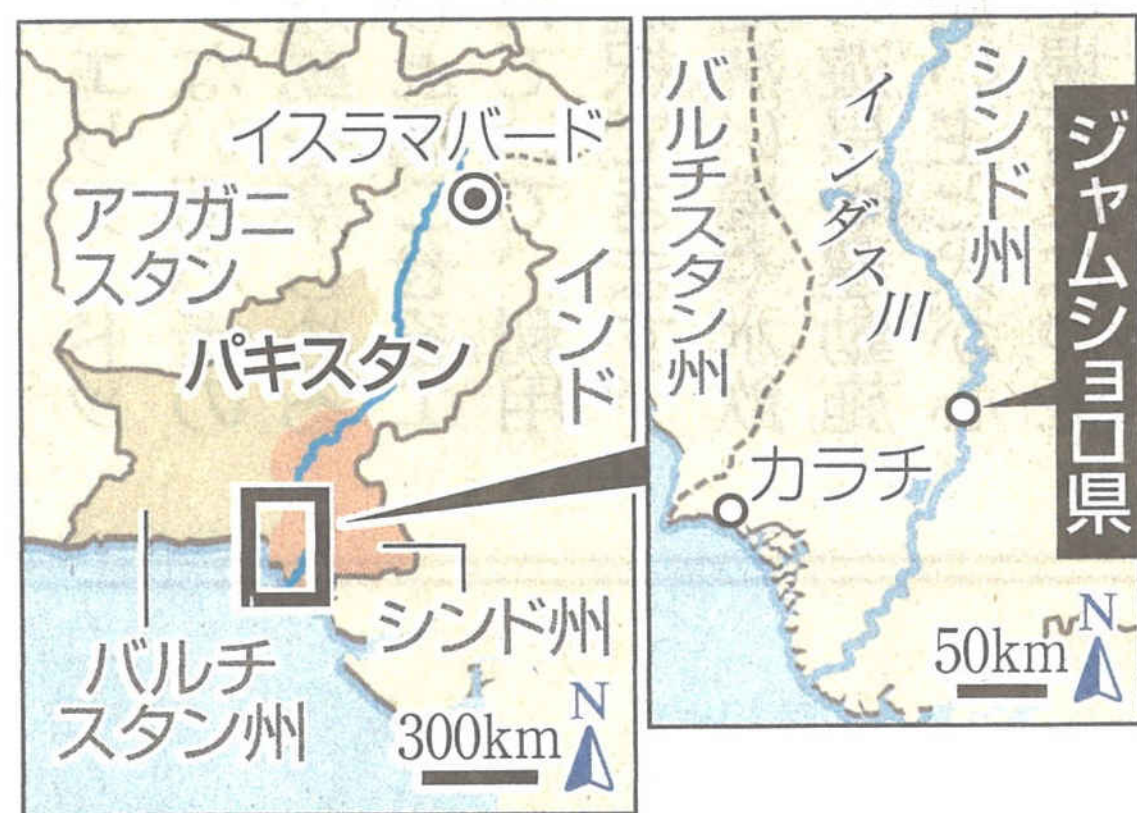


清潔な水 足りない

大洪水で甚大な被害を受けたパキスタンでは、被災者が今も過酷な生活を強いられている。食料や清潔な水の不足、病気のまん延など課題は山積。異常な大雨を気候変動の影響とする見方も出ている。日本の支援関係者は「遠くの国の災害かもしれないが、温暖化など地球規模で考えると、日本ともつながっている」と支援や関心を持つよう呼びかける。

(山中正義)



パキスタンの大洪水
6月中旬からの豪雨で大規模な洪水が発生。国土の3分の1が水没したといわれる。パキスタン災害当局によると、1700人以上が死亡し、被災者は3300万人以上に達する。国連は復興のために総額8億1600万ドルが緊急に必要と推計し、各国に拠出を呼びかけている。

シンド州のタンドアラール県で被災者に支援物資を手渡す池田敬さん(中央)

大洪水被災のパキスタン



被災者が暮らす簡易な家屋＝シンド州のミルプルカース県で、いずれもA.M.D.A提供

病気まん延 食料不足も深刻

「湖にしているような錯覚を受けた」。九月下旬、パキスタン南部シンド州のジャムシヨロ県にある集落は、周囲を水で囲まれ孤立していた。集落外へ出る手段はボートだけ。水深が五層近くに達する場所もあった。国際人道支援に取り組む岡山市の団体「A.M.D.A(アムダ)」調整員の池田敬さん(四七)は九月下旬から約十日間、被災地を視察。帰国後の取材に「水が引いていない地域が多かった。食料支援がまだ求められており、かなり過酷な状況だった」と語った。

池田さんは、被害が大きかったシンド州と南西部バルチスタン州に入った。情報収集だけでなく、食料不足が深刻ないくつかの地域で小麦粉や米、砂糖などを詰めた袋を三百七十五袋(計七・五ト)援助。蚊帳や防水用シートも配った。食料配給は一世帯に一袋が原則。だが、配給場所のそばでは、木やシートなどを使って急いで簡易住居を作り、世帯を増やそうとする被災者も。必死な姿に「本当に困っている」と圧倒された。家や家畜は流され、田畑は水没。仕事も失った被災者たちは「支援を待つしかなかった」。

食料だけでなく、清潔な水が手に入らず、泥水を飲んでいられる地域もあった。衛生状況は劣悪で、下痢や皮膚病、腸チフスなどがまん延していた。「被災地の疾患の八割はきれいな水がないのが原因」で、清潔な水があれば防げる。A.M.D.A



皮膚病、腸チフスなどがまん延していた。「被災地の疾患の八割はきれいな水がないのが原因」で、清潔な水があれば防げる。A.M.D.A

は今後、水のろ過装置を支援しようと計画している。大洪水は、北部山岳地帯の水河が解けて大量に流出したように、気候変動が一因ともいわれる。そのため、被災者の中には「われわれは被害者。温暖化の原因は先進国だ」と主張する人や「海外からの支援は当然」と考える人もいた。

池田さんによると、被災地ではパキスタン政府や国内外の援助団体が活動しているが、まだまだ不十分。都市部近郊と離れた場所では差も見られ、都市部から遠い地域に行き届いていない。池田さんは「水が引いても家はなく、公共的な建物や電気、ガス、水道、道路などインフラ整備も必要。元に戻るまでには数年かかり、これからが正念場だ」と話す。復旧復興とともに「(災害の)予防も考える必要がある」と訴える。